九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

原城一揆の研究

檜垣，元吉

https://doi.org/10.15017/2338991

出版情報：史淵. 47, pp.67-109, 1951-06-05. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

原城一揆の研究

檜垣元吉

緒言

寛永十四年の末から翌年の始に亘つて島原、天草の地方に展開された原城一揆に関する史料として先づ挙ぐべきものに「原城紀事」二十巻がある。同書は島原藩儒川北重熹の著で広く古今の史料を渉猟して編纂され原本は漢文であるが我等は此の著作によつて先づ一揆の全貌を知ることができる。

著者はその弘化三年二月の日付を有する凡例に其の編述の趣旨を次の如く述べて居る。

「寛永耶蘇之乱、元和偃戈を距る二十年、治日之小乱也、是を以て載籍紛紛、其の最も取つて証とす可きは、当時戦自記する所、伝えて今に存す、今にして修めずんば恐くは散じて烏有と為らん。此の編を述ぶる所以也。」

即ち彼は先づ原城一揆に関して徳川末期迄に編輯せられた諸著を見てその紛々として帰するところなきを知り、信ずべきは当時実戦に参加した人々の自記する直接史料であると考えた。而して此等の貴重な史料も正に湮滅せんとして居ることが此の著述の動機となつたと云うのである。

又大村家蔵書の中に原城一揆に関する無題筆本があり、事件当初よりの同藩の対策を知る上に最も価値ある史料であるが、此の書の巻末には次の如く記されている。

「世間に嶋原記トテ書物二三巻開板モテアツカイ候、我等モ二三返見申候、テニハ違中〳〵無穿鑿成事而已ニテ候、殊ニ二月廿七日ノ夜ノ城攻申様子ナトハ目ニテ見申人トハ不被存候、少ノ智慧ヲ見セントテ書ヲ作リ能見タル者ワラハレ候、其上武□不足ヤウニ被思候事不便ニ存事ニ候、嶋原記ノ説クシカニハ被存間布事」

之を以てみれば此の書も「原城紀事」と同じく、島原の戰斗中或はその直後に記述された覚書類の外に稍〻時日を経過した後に各種の誤伝が叢生し或は俗書の刊行されたことに刺戟されて著作された同じ性格を持つたものであることが知られる。

原城一揆に関して此等の著者の言うところは現在に於ても変つていない。加うるに当時の記録作者が参照し得なかつた史料が今日に伝えられ特に此の戰斗に於て攻撃軍の主力となつたものは九州の諸大名であつたから、若干の湮滅は免れないにしても九州各地に関係史料の多くが存在することが予想され、既に或ものに就いてはその発見が報ぜられ、又既に九大の図書館研究室等に蔵せられて居るものもある。

古来九州は切支丹と深き因縁を有し、史料に富むと共に、原城址の如きも略々其の地形の旧観を留めて居るから諸般の條件は此の調査のよき収獲を約束するものであると思われる。

原城一揆には戰斗に従事した諸藩のみならず直接関係を有しない各藩の使者も多数蝟集し無数の報告、覚え書き、地図等が作製されたことが予想されるにも関らず従来は主として幕府、細川藩、鍋島藩及び松倉藩以外の史料は利用されることが少なかつたから更に広く多くの史料が利用さるべきであろう。

今原城一揆の研究を為さんとするに当つてその見通しをつける必要に迫られたので、現在得られた史料を中心として序

說的概觀を試みることとしたい。

原城圖

我が丸州文化史研究所の藏書中に一葉の原城図がある。これは福岡縣遠賀郡の旧庄屋古野氏の寄贈されたもので極めて詳細に描かれ一見して島原の乱に関する好史料であることが知られるのであるが、此の図は実戦の経験に基づいて福岡藩士の何人かゞ製作したものと推定される。

原城攻囲の末期に当つて黒田藩の分担は最右翼天草丸に対し、大江口に面する三百間であつたが、此の図によれば天草丸の眼前咫尺の地に独立した小丘陵がありその上に一の望楼が建設されて居る。敵城に近接してかくの如き施設を為すことの容易ならざることは直ちに想像されるところで、あたかも此の望楼附近の海上は黒田藩の水軍の包囲する水域であるからその火砲の援護によつてその作業が遂行されたことが先づ考えられる。

しかし黒田藩の記録を調査すると更にその詳細について知ることが出来る。

「天草丸の此方に青山と云岩山あり。天草郡（「丸」の誤か）ハ其下にて間四五間程の嶮岨なる山なり。忠之公竹森清左衛門に命せらるゝは、其方土石のエミも有之故黒田三左衛門と申合せ此青山（ねふと山共云）を取へしとなり。」

清左衛門畏り井楼を造り狭間を開き健卒を其内へ入、車を仕懸け鉄杖ニて押進退自由なる様こしらへ前に竹束を以て山に登る。又大竹を二本たて夫々横手を段々にゆひ付さかしき所を乗り上り井楼を持をこして乍ち山にあくる。是皆夜中の働にて三左衛門印を山上に立し故朝霧の晴間に諸手よりいちしるしく見へしかハ諸家よりハ黒田家のするとき事を称し、又黒田ノ家中にて竹森かエミを上下共に甚感せしとそ。此山の井楼より鉄砲打かくるに便り能て賊屈詫すとなり。」

（「肥前國嶋原賊徒御取潰之次第」）

とある。かくの如きことは黒田藩の記錄をもつてはじめて知ることが出来ると言ひ得るであろう。

旧来原城図として世に知られて居るのは大正十五年刊「切支丹史料集」に載せられた大垣史談会蔵「原之城の図」及び長崎縣諫早町諫早氏藏の「原城包囲陣形図」であり、前者は大垣藩主戸田左門氏鉄が松平信綱の副使として攻撃に参劃し同家の家老大高金右衛門の所藏にかゝる原本を番頭として従軍した山本多右衛門が借用して謄写したものとされ、写眞はその一部分であるが多くの書入れがあり中に貴重なものも少くない。例えば二ノ丸下の鍋嶋藩の仕寄場には

「鍋島北丸一番乘石井彌一右衛門二番乘石井傳右衛門放手一番ハ石崎五郎右衛門二番田代四郎左衛門也。築原源右衛門田坂與右衛門等雖先掛仕鍋島注進ニ無之者浪人故哉。」

と記す等此の戰斗に於て重要な役割を演じた浪人について看過すべからざる事項が記入されて居る。

諫早氏所藏の図は同氏の祖茂敬が当時鍋島勝茂の家老として勇名を轟かし、乱平いで後將軍家光の面前で戰況を講述した人物であるから此の図はその時使用したものと推定されている。

此の種の地図、即ちその或物は戰場に於ける見取図の如きものから、或は乱後大規模に画工をして彩色させたものに至るまで各種多様の地図が製作されたこと、且つ夫れ等の千差万別であることが想像されるから先づ原城図の綜合的研究が行はるべきであり、現在島原市公民館にその二三種が所藏されている外、立花家（柳川藩）細川家（熊本藩）に於ても新たに原城関係地図が発見されて居る。

又原城の攻囲も初めは上使板倉重昌の下に鍋島氏を主力とし松倉立花有馬の藩兵のみによつて攻撃されたから当時の地

図も存在するわけで（例えば細川藩で製作されたものに「有馬之絵図」がある。）各種の地図の出現が予想され此等は絵画によつて示されたもの以外に記入された解説に重要な史料を含むものが多い。

黒田藩の史料

寛永十五年一月十二日板倉戦死の報至るや、家光は九州諸侯をして急下せしめるのであるが時に諸藩の兵一時に街道に殺到したので人馬不足して困惑せざるものはなかつた。時に黒田藩主忠之は自ら駅吏と折衝して人馬を督促し晝夜殆ん宿泊することなく九州に向つた。其の時忠之は

「革袋ニ金子を被入御襟にかけ給ひ馬に乗らせ給ふ。宿々ニて馬を御借り替の時、馬まいらせし者にハ革袋の金ると先々へ云伝へし故宿々ニて馬を引立待居たる様に有けれハ馬にさしつかへなかりしと也」（「原城記」）

と云われ、競争者の立場にあつた細川氏を制して速かに九州に到着したと云われ、このことは黒田藩の記錄に於ては大いに誇とされた。

大坂乗船の時も藩士黒田三左衛門が先づ大坂に至つて船を雇入れたのであるが、彼に先立つて細川氏の家老は一艘八貫匁の「てんとう船」を六貫目に値切つたのに対して三左衛門は更に二貫目を増して十貫目で雇入れたので「諸手都合宜しく忠之公ハ細川殿より一日先きに若松に着給ふと也、」「此時黒田三左衛門船借りの致能して便り宜きを他家よりも称美といへり。」と記している。

藩主忠之は斯くの如くよく細川氏を凌いで嶋原に馳せ下つたわけであるが藩兵の戰場えの到着は大いに遅れ上使の怒を招いたことが鍋島家の記錄に見えている。

「黒田右衛門佐先鋒ノ将黒田美作兵一千ヲ率テ頃日有馬ニ来リ陣スト云ヘトモ其余軍兵尚未タ至ラズ両上使惣軍の遅延スル事ヲ怒譴ム」（「有馬原城之役」）

又久留米藩の記録にも

「黒田州十五日ニ出陣之由おそく候とて上使衆又よひに遣由ニ候」（「嶋原陣覚書」）

とあるから黒田藩が出兵に関して上使の督促を受けたことは事実であろう。此処にも戦斗参加者がその体験を記した覚書、武功談の類が史料として高い価値を持ちつゝ猶稍の一面に過ぎない場合があり他の史料と参照することの必要なることを物語る一例をみることが出来る。

以上の史料によつて思わしめられるのはそれが濃厚に武功談的性格を持つことである。戦斗に参加した者の筆録したものが最も貴重な史料であることは言う迄もないが、此等の文献が成立する直接の動機となつたものは功名談を伝えんとする意志に外ならないから、誇張と省略とは免れぬところで、此の意味に於ても綜合的把握の必要が感じられる。

福岡に於ける明治初年の学者江藤正澄の筑前嘉麻郡に関する紀行文たる「秋濃假寝」によると彼は同郡桑野村なる江藤彦左衛門の家を訪れ

「此家は嶋原御陣ニも随従せし由にて冑一頂を蔵せり」と記し「又嶋原御出陣御陣押付巻物もあり」

と述べている。要するに原城一揆には各藩多数の武士が参戦したのであるから重臣と云わず軽士と云わず必ず何等かの紀念物、記録を残したことは言を俟たないから此等の史料は採訪探索するに従つて出現することを期待るし得るであろう。

併し福岡藩に関しては記錄の見る可きものに乏しく「忠之公嶋原江江戸より御発向之覺」「島原之儀毛利甚兵衛被書上候覺之寫」「於原城御陣取之次第」「御當家島原覺書」等があるが何れも史料として勝れたものとは言い難い。

註　猶福岡藩の支藩秋月の黒田氏系統の史料に

「肥前國嶋原賊徒御取潰之次第」

があり原城一揆に関する最も典拠とすべき史料である。其の成立に関しては巻頭に

「長井八郎右衛門盛鎭後号道牛　磯與三右衛門景久法名日玄　物語其外古老之云傳　小川碩翁誌焉」

と記し、此の外「原城記叙」なる原惟清子直の序文と「原城閑紀跋」なる小川氏友入道碩翁の跋文によつて更に其の詳細に就いても知ることが出来る。序跋共に延享二年に記されている。

此の書は主として秋月藩の奪戰を記すものではあるが宗藩に関する記事も極めて詳細でその点有力な史料に乏しい福岡藩最もよき史料である。

益田四郎の經歷

通説によれば四郎時貞は小西行長の右筆であつた益田甚兵衛好次の子で、五歳にして書を善くし、得る者装軸して賞鑒する程であつた。（「板倉氏覺書」）嘗て小姓として熊本の士人須佐半之丞に仕え、辞去して後は長崎に遊学一揆蜂起の時は父のもとに在つて年十六であつたと称せられて居る。

現在に於ては益田父子に関して積極的に其の出自を明らかにすべき史料は無いと云つてよいがこれとやゝ異つた所伝が久留米藩系統の史料たる「島原陣覺書」に記されている。即ち

「天草四郎、天草大矢野村庄屋小左衛門養子歳十六、実父増田甚兵衛、但明智日向守殿家來筋之者由」

と云うのであつて、少くも当時かゝる風評があつたことが知られる。

細川藩系統の記錄「肥前有馬戰記」には四郎の父甚兵衞を百姓とし、四郎に関しては次の如き割注がある

「此四郎ハ十四才迄ハ御家中須佐美権之允所ニ小草履取ニ而居たりしと老人共語申候」

即ち小姓と草履取とでは其の間に身分的隔りがあり、士人であるか奴僕であるかの差異を示すものとも考え得る。

更に「白石紳書」が四郎年十二三の頃長崎に在つて明商の為に賤役を執つたとして居ることも亦通説と矛盾する。遊学と外商の為に雜役に従事することとの間に大差あることは多言を要しない。

こゝに原城一揆以前の四郎の閲歴を纏めてみると彼は元和八年に生れ五歳にして書を能くすと云われ世人に神童的印象を与えた。次に熊本に出て須佐半之允に仕えるのであるがこれは少くも七八歳以後のことと考えられる。

ついで年頃は不明ながら長崎に遊学することとなる。これと十二三歳の頃長崎に於て明商の為に賤役に従事したことゝ結び付ける理由はないが「白石紳書」説では寛永十、十一年の頃長崎に居つたこととなる。

以上の史料を綜合すると一応次の如く考えられる。即ち益田甚兵衞は明智光秀の遺臣小西行長の右筆と云はれる武門の出身であつた。然るに江戸時代初期に及んで農を業とし、其の子四郎は少年時代或は熊本に出て武士に仕え長崎に遊学したとも伝えられるが事実は熊本に於ても長崎に於ても奴僕としての生活を送つたものかも知れない。甚兵衞が其の三子（一男二女）のうちの嫡男を庄屋の養子としたことも亦当時に於ける帰農せる浪人の苦悶の現われとも解せられる。

無理なり

攻撃軍に関しては今日と雖も比較的多くの史料が存して居るのに対し一揆側の動静に関しては伝えられるものが極めて

限定されて居る。

現在に於ては單なる宗教一揆として之を見る者はないけれども、此の一揆は近代農民運動の性格を有すると共に複雜な宗教的性格を交えて居ることも亦事実であつて此の歴史事実の意義は一揆側が如何なる意識を以て団結し、抗戰したかに深き関係を持つものである。

一揆を構成したものは指導的地位に立つ四十人余の浪人群、次に松倉氏或は寺澤氏の苛斂誅求によつて窮地に陷つた農民達であるがこれには事件勃発の端緒となつた旧切支丹と共に、少くとも当時は基督教徒ではなく前者に圧迫されてやむなく一揆に参加した者もある。

一揆の初めに当つて狀勢を探る為天草に渡つた細川藩の歩行士井口庄左衛門の覚書によると（天草江参様子承届申覺」―「肥前國有馬戰記」所收）

「一　十一月十六日天草之内五領と申浦へ着仕候。五領村之百姓共此中切支丹ニ而無御座候ニ付一揆五領村を放火仕候故五領村之百姓共逃散り船ニ乘居申候所ニ一揆共申候ハ切支丹ニ成候ハヽ組ニ入可申候。無左候ハヽ討果可申と断ニより無了簡昨日十六日五領村之百姓共切支丹ニ成申候由申候。家共悉く燒拂申候付五領村之百姓共船ニ其儘居申候。此様子尋申百姓ハ五領村之内藏之允と申者ニ而御座候事。」

三万余の一揆中には斯くの如くの如き多くの農民が含まれていたことであろう。此等の農民も落人として城外に逃れ出でた若干の者を除いては最後迄抗戰したと考えられるが、彼等の立場は最も同情に値するものであつた。此等の人々に関して「天草一揆實錄」に

「廿五日の夜松平右衛門佐（寛永十五年一月）（黒田忠之）手へ落人壹人来、其者申ハ城内本切支丹ハ堅ク一味仕、ムリ成ノ者ニハ目ヲ付ケ中々サヽヤキ事ヲモ申サセス候」

と記している。註

註　此の書は巻末に「此一書松平伊豆守信輝之家士中山氏知之傳寫可秘」とあり松平氏系統の記錄でわないかと思われる。「三浦重門覺書」と合册され「原城紀事」等に見られない史実を伝えている。

篤信者にして死を見ること帰するが如き者もあつたであろうが、心ならずも籠城した者の中落人となつて城中より脱出せんとした者が多かつたことは当然のことと言わねばならぬ。

寛永十四年十二月廿四日夜半城中より久留米藩の陣営に投じた落人北村雅樂丞の口書は注目すべきもので

「女房子貳人城ニ捨置出申候。女房子共者幾利支丹にて候。雅樂者溫泉ノ門徒眞言宗にて御座候事」

（「嶋原陣覺書」註）

とあるのは自からが切支丹信者に非ざることを主張して罪を逃れんとしたとも考えられるが、彼の女房が篤信者であり雅樂丞は必ずしもそうではなかつたことも一応考えられぬことはない。

註　「嶋原陣覺書」

十巻本、貞享二年二月廿二日の奥書があり久留米藩の有馬内藏助、同内記によつて編纂されたものである。即ち

「此覺書運ニ承傳候趣有增記之、下書ニ而差上之候、年久敷事候間相違之儀も可有之候、乍然扣を以書記候品ニハ皆成儀御座候、尤此外不承傳事數□□候、御吟味之上被遊□候樣奉存候以上」

とあるから乱後四十七年を経たる後恐らくは有馬侯の命をうけて製作したものと思われるものである。

寛永十五年の二月一日には松平信綱の命によつて時貞の母、姉の四郎父子宛書狀と、四郎の姉婿大矢野村の渡部小左衛門、甥の瀬戸小兵衛より籠城中の縁故者渡部傳兵衛、同左太郎、入津七左衛門、瀬戸理左衛門宛の書狀が城内に送られたが其の中にはゼンチョ（異端者）を出城せしめんとして

「前々よりのゼンチョ当分無理に吉利支丹に勧められ罷り成り候は、聞召し届けられ、御助けなさる可く候こと、上意の由に御座候」

と述べられてある。

無理なりの切支丹を包含していることは正に一揆の弱点ではあつたが信綱の企図は成功しなかつた。

「天草一揆實錄」には此の時の瀬戸小兵衛等の書狀に対する渡邊左太郎の返書を「八日城中ヨリ返事」として載せている。

「十　心ヤマノ梢ハ春ノ嵐カナ

ハヽイソサシテハシル村クモ

ハツカシク候ヘ共ナミタヲ水心ヲ墨ニスリホルシハサンタマリヤ様サンチア様ニケル様イナシヨ様フランシスコ様々モロヽヽノヘアト様の御力ヲ以テ一筆申上候心ハライソニテハアイ可申ト存候トモカクモテウス様ノ御ハカライ第ニ候何モヘ御心得可被下候

二月八日　　渡部左太郎十

瀬戸小兵衛殿　　」

誤写の部分が多いが籠城者の信仰告白として清純なるものを感ぜしめる。

一揆に關する情報の流布

天草一揆の遠因は今触れぬこととして何時の頃から此の運動が表面化したかは九州諸藩の動靜を中心に考察しようとする場合先づ問題となる。

先づ　松右衞門　善右衞門等の浪人等が益田四郎を擁して蹶起すべく流言を放つたのは「山田右衞門作申口」によれば寛永十四年の六月中である。その背景としては既に多大の損毛を予想せしめる不作があり、その不作による農民の動搖が浪士等の流言を放つ機会となつたであろう。

かゝる情勢が次第に推移して十月廿日頃に至ると島原藩内に「天草領内之百姓共何事とはしらず騒申由嶋原江相聞候」（「切支丹蜂起之次第」註―松倉藩記錄）

註　「切支丹蜂起之次第」

原本は中津市小幡図書館藏。諸系統の記錄を合册したものである。

先づ「寛永十四暦丑ノ年於肥後國之内寺澤兵庫頭殿領天草肥前之國之内松倉長門守殿領嶋原吉利支丹蜂起之次第拙者覺候通有增書付申候」と題する寛文九年佐野彌七左衞門の記錄を始めとして結城藩士水野平内の記した「寄手之諸軍勢手負死人之事」以下の覺書、會津藩士原田氏の筆錄した「原田伊豫天草有馬ニ而覺悟之覺」を合册してある。

と云うが如き情報が入るに至り天草領内の一揆が正に勃発せんとするに至つた。要するに一揆の空気は先づ天草に於て醸成されその雰囲気が先づ最も近距離にある島原半島南部に伝えられたと想像される。

一方松倉領たる島原半島に於ては寛永十四年秋は

「領内甚の損毛にて年貢未進多き故に代官取立るといへ共、はか〴〵敷納めず。夫により家老中差図して不納分不残取立へしとて九月末者頭を差出し稠敷催促」

したけれども効なく苛酷な誅求を行ふに至つた。（「原城記」―秋月藩記録）

その結果半島南端の口ノ津に於て豪農の一人與三左衞門の嫁を水牢に投じた事から

「頭百姓凡七八拾人程一同して相果るとても此一念をはらし度旨を言談し縁者親類ハ本より同心して」

農村の指導者層の団結を中心として七八百人の一揆をみるに至つた。（その時期は十月十九日頃であつたらしく、「有馬戎役記」に「十月十九日嶋原口の津村に農民百余人集て宗門を唱ふ」と云つて居るのは同一の事件であると思われる。）

以上の如く九月末松倉藩は無謀にも年貢上納を農民に強要せんとし物頭を派遣したのであるが既に此の頃には嶋原領不隠の風評は近接せる地方に伝えられて居たらしい。

即ち久留米有馬藩の記錄「島原陣覺書」によると

「嶋原領幾利支丹宗門之者起候由丑九月下旬何方より相聞候とも無之粗久留米に風評」

が聞えその情勢が在国の家老から江戸在住の重臣等に報告されて居る。併し現地の実状を確認する為藩士白石重右衞門有間加津佐に遣したのは十月二十二三日で既に同地方及び隣村が切支丹化された後であり、ついで猿木、五十田の両藩士が嶋原に派遣されたのは既に諸方の一揆蜂起後の十月廿五日であつた。

鍋島藩はこの一触即発の形勢を十月十三日以前に於て確認したらしく同藩の多久美作は同日附書狀を以て福岡の黒田藩

の代表者黒田美作及び小河内藏允に向つて島原の狀況を報じて居る。

肥後の細川藩も亦早くから情報を得て居と思たわれるが記錄に現われるのは管見では等しく十月廿七日で、同日の

「辰之刻飽田郡之内小嶋村より申越候へ松倉長門守様御領分肥前嶋原ニ当リ火之手夥相見候鉄砲の音なと仕候由申越候ニ付様子為可承御小早を申付彼地老中へ様子尋ニ歩候御使番を遣申候」

とありその後に藩としての行動が起されているから同藩が一揆について確実な認識を持つたのは或は若干他藩に後れていたかも知れない。

要するに斯くの如く既に一揆を予測され得る狀態にありながら猶年貢の上納を無反省に固執したところに一揆の必然性が先づ認められるべきであろう。

原城一揆の影響

原城一揆の蜂起は我が国後期封建社会初頭に於ける反歷史的転換に拍車を加える結果となつた。又世界的背景を有する切支丹が此の事件以後はその精神的遺産を後代に伝え得ない程に致命的打撃を蒙つたことが日本の運命にとつて重大な意味を有することは言う迄もないが、小にしては例えば戰後の論功行賞に於ても鍋島藩の如き藩士の入札によつてこれを決定するものがあり、且つ其の間浪人が介在してその取扱ひも各藩各様の変化が見られる外、一揆を中心として武士の生活の実態を知るよき手懸りとなる事象が極めて多い。

又九州の処々に点在するかくれ切支丹には島原の乱の落人に由来すると伝えられるものがあり、福岡縣三井郡今村の夫れは右京左京兄弟が漁夫に身をやつして筑後川を上り土着して子孫平田姓を称したと言はれ、又同じく嶋原を落ちのびて

此の地方にかくれたジョアン萬右衞門は後に至つて遂に発見され本郷村ハタモン場で刑に処せられたと伝えられる等或は一の説話にすぎないかもしれないが九州切支丹史研究の一部門として興味深いものがあると思う。

島原地方にはかつて「有家有馬の馬ぬすと、布津堂崎の錨切り」と云う諺が行はれた。此等の地方は島原半島の南部に属し南目と称せられる地方で北目即ち半島北部とはその気風に於て異るものありとされたのである。即ち北部の住民が大体に於て旧来より土着の民であるのに対して南部は島原の乱によつて居民殆んど尽きたので幕府は天領及び西国諸大名に割当てゝ農民を出さしめ之を無人の各地方に移住せしめたのであつた。此処に於てか所謂南目の人々は北目の人々と自づから言語をはじめその風俗習慣を異にするに至り、現在に於てもその名残を留めて居る。即ち一揆終息後南目地方に対して異常な植民が行われたのであるが此等の農民が或は瀬戸内海の小豆島から対馬から種子島から集められたことは今日それ等の地方に残された史料によつて具体的に之を跡付けることができる。其れ等の農民が如何に新しい社会を形成して行つたか、その社会が周囲と如何なる交渉を持つて行つたかは極めて興味ある課題である。

A Study on the Christian Bevolt of *Hara*-Castle

By G. Higaki

This essay is an attempt to study on the Christian Revolt of *Hara*-Castle (原城), the *Hizen* (肥前) province in Japan, which occoured in the 14th and 15th years of *Kan-ei* (寛永). And the stand-point of the study is new one, utilizing the original sources, the most part of which was written in the Kyushu district. The main points are following: a) historical sources; b) process of propagation of the news of the revolt; c) the acts of the feudal lords in Kyushu who heard the news; d) career of *Amakusa Shirō* (天草四郎), leader of the revolt; e) organization of the revolt; f) influences of the revolt.